

# コメントライナー

第6405号

2018年3月9日(金)

## ◎敵は「被害想定」にあり

防災・危機管理アドバイザー 山村 武彦

### ◆想定外で済ませていいのか

2011年流行語大賞にノミネートされた「想定外」という言葉が、同年3月11日の東日本大震災後、全国で飛び交った。「想定外の津波」「想定外の超巨大地震」「想定外の全電源喪失」などなど。それは人智を超えた未曾有の災害を一言で表す枕言葉となった。その一方で「予見不能、不可抗力だから責任追及はタブー」という本音を言外ににじませる言葉でもあった。

訓練通り津波避難場所に避難したにもかかわらず、犠牲者を出し被災した一般市民が想定外と言うのは至極当然である。だが、平時から最悪を想定し安全を推進する防災関係機関や原発関係者が多用する言葉ではない。それは想定すべきことを想定しなかった者の言い訳にしか聞こえない。そして、この震災を想定外として片づけ目をつむってしまえば、これからも同じ悲劇が繰り返される。だからこそ責任ではなく原因を追求し、その教訓を生かすことが極めて重要なのである。

### ◆津波避難場所まで流されるとは！

地震や津波は連綿と繰り返されてきた自然現象に過ぎない。その想定や対応を誤った時、災害になる。市区町村は被害想定に基づいて地域防災計画を策定し、避難場所を定め訓練を行ってきた。宮城県南三陸町志津川の防災庁舎に押し寄せる津波は、県の被害想定では最大6.7mと明示されていた。であれば12mの防災庁舎屋上への避難は妥当と思われた。しかし直後に15.5mの津波が襲い住民や町職員たちを押し流し、避難場所へ避難した人まで流されてしまった。

元凶は災害を過小評価した被害想定である。日本の太平洋プレート沿いでM9級の超巨大地震は起きないという仮説(地震モデル)で被害想定が作られていた。実際にはカムチャッカ地震、アラスカ地震など、震災までの60年間に太平洋プレート沿いでM8.6~9.2の地震が4回も発生していた。地震学会による震災後の敗北宣言は遅きに失した感がある。

### ◆予測誤差を明記せよ

現在の科学技術で地震規模や津波の高さを正確に予測することは極めて困難である。震災当時気象庁は、発生した地震から割り出す津波予報には1/2~2倍の誤差を認めていた。実際に発生した地震から割り出した予測でも誤差があるとしたら、発生する前に予測する地震モデルや被害想定に1/2~2倍の誤差があっても不思議ではない。南三陸町の津波予測が最大6.7mで2倍の誤差を周知していれば13.4m以上の場所に避難したはずである。

南三陸町防災対策庁舎の屋上では、大波襲来に備え円陣が組まれていた。逃げ場のない屋上で肉親の安否を気遣いながらも最後まで人間の尊厳を失わず、女性や住民を中に囲い込み、男たちが両手を広げた決死の円陣。しかし、直後に大津波が襲い44人が犠牲となった。最後まで防災無線で避難を呼びかけていた女子職員も含め壮烈な殉職である。想定外で片づけず、予測を決めつけず、被害想定に誤差を明記すべきではなかろうか。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003